

試験紙法による味覚感度の母と子の関係(その1)

—食生活の家族関係の研究—

東筑紫短大 ○納身節子 田代 桂子 磯 孝子 九大 医公 池田 正人

目的 試験紙法による味覚テスト法を用い、味覚識別能と食生活などとの関係についてすでに青年期の性差、地域差、夏期・冬期の比較などについて報告した。味覚感度は性・年齢・地域・生理的・心理的・食習慣など複雑な諸因子が作用し個体差を生じるといわれ、性差・地域差を青年期で認めた。特に塩味識別能が関係する要因を探るため、本研究では年代差と家族関係を検討したので報告する。

方法 a) 対象 北九州市在住の母(平均年齢44才)と子(女子学生・平均年齢18才)の170組

b) 試験紙法による味覚テスト ①味覚テスト用試験紙: 既法の通り ②テストの方法: 各呈味の試験紙を6通りの順序の組み合わせで10枚1組とし、全口腔法による

c) 食習慣調査

d) 食事調査(秤量法による母と子の個人別食物摂取状況調査)

結果 母と子の味覚識別能を正答率でみると塩味1(塩化Na 0.11%濃度)と各塩味の合計で、子の正答率が母より有意に高い。この結果は集団としてみた時、塩味は加齢と共に味覚の識別能力が減退すると考えられ母と子の家族間での相異を認めた。四原味中他の三味の正答率は、母は甘味>酸味>苦味の順に、子は甘味>苦味>酸味の順に低下していた。母と子の比較では子の正答率が高く、苦味については有意性を認めた。正答率と関係因子についても報告する。